

## 〈旅行記の紹介〉

# ゲーテの『イタリア紀行』について

松 田 幸 子

### はじめに

ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749–1832) がイタリア旅行に出発したのは1786年9月3日のことであり、ゲーテ37歳の秋であった。この旅行はゲーテにとって人生の転機になったといわれるほどの体験であったといわれている。

ここでは主として出発からナポリまでの旅の様子を紹介し、シチリアと2回目のローマ滞在のことは省略する。

ドイツ文学者として有名であり、また『イタリア紀行』の翻訳者でもある相良守峯は、この旅行について次のように書いている。

「詩人の生涯の転換期であったこの旅行の前後は、同時にまた従来の全創作生活に対する決算の時でもあった。……そしてワイマルにおける十年間の不生産時代、種は蒔かれても刈り取る余裕のなかった時代に、未完のままに残されていたものを、詩人はこの旅行中に仕上げなければならなかったのだ」

ゲーテ自身もこの旅行中、この旅行によって自分は今までとまったく違った人間になったと述べている。

しかしここではゲーテの文学がこの旅行によってどのように変化したかを論ずるのではなく、ゲーテが一人の旅行者としてどのようにイタリアを観光したかに視点をしぼり、彼自身の言葉を引用しながら彼とともにイタリア観光を楽しみたいと思う。

### 1. 出発するまで

話をすすめる前に当時のイタリアについて少し述べておく。18世紀の終わりのイタ

リアは、現在の私たちが知っているようなイタリアという国ではなかった。西暦476年にゲルマン民族によって西ローマ帝国が滅ぼされて以来、地中海に突き出たこの国が統一国家を形成したことはなかった。ゲーテが旅行した当時、イタリアの北部、つまりアルプスの南側は一部の地域を除き、神聖ローマ帝国、すなわちオーストリアのハプスブルグ家の領地であった。さらにヴェネツィアやフィレンツェのように金融や貿易などによって勢力をもつ都市国家も分立していた。またローマを中心とした中部イタリアはローマ教皇領であり、シチリア島を含む半島の南部はフランスのブルボン王朝の支配下にあった。ちなみにイタリアが現在のような形の民族国家として統一されたのは1861年であり、明治維新の7年前のことであった。

ゲーテは大学で法律の学位を取得した後、生まれ故郷のフランクフルトに帰って弁護士になったが、弁護士の仕事はあまりせずに詩作や創作などの文学活動に熱中していた。そして24歳の時に『若きウェルテルの悩み』を発表して一躍文壇の寵児となった。

ハイネマンの『ゲーテ伝』によれば、「文学界においてゲーテの占めていた指導的地位は、若き詩人の私的生活に影響するところがなくはなかった。名だたる人々が若き天才と知り合いになろうと押し寄せてきた」というのである。これに対して神聖ローマ帝国宮中顧問官の肩書きを持つ弁護士のゲーテの父親は、金にもならぬ芸術のために、父が固く予定しておいた行路から若き法律家がそれるようなことがあってはならぬ、と不機嫌になっていた。父がゲーテのために予定していた路とは、レーゲンスブルグとウィーンに滞在して（法律）の修業をすること、イタリアへ旅行すること、そして最後にフランクフルトで身を固めることであった。しかしゲーテはある時「私のあらゆる才能のうち、法律は最も劣等なものの一つである」と告白して法律を嫌っていたということである。

ゲーテが招かれてワイマールに行ったのは1775年11月のことであった。その間の事情はハイネマンの『ゲーテ伝』に詳しいので省略するが、当時のドイツは神聖ローマ帝国の支配下にあり、群小の多数の国家が分立しておりワイマール公国もそのなかの一つであった。

『ゲーテ伝』によると、母は何とかしてゲーテをフランクフルトに引き留めておこうとしたようであるが、ゲーテは迎えの馬車が来るとすべてのものを投げうって馬車に乗ったという。おそらくゲーテは、うるさい父のもとから逃げだしたいという気持ちが強かったのであろう。

ワイマールはフランクフルトからゲーテが学生時代を過ごしたライプティヒに行く途中にあり、ゲーテやシラー、ニーチェなど多くの文化人ゆかりの地として現在では世界遺産に登録され、ドイツ観光の一つの拠点として旅行雑誌にも紹介されているが、当時のワイマールは人口6000人ばかりの小さな町で、「家屋はたいてい見すばらしくできていて、ほとんどなにもかも貧相な田舎町の侘びしい観を呈している。一段とこの感じを深くする貧民街へ行くには、大通りからさして離れる必要もない。首都らしい眺めを市に与えるような広場は唯のひとつもない」とハイネマンは『ゲーテ伝』の中で書いている。

しかしゲーテは若い詩人としてワイマールの人々に歓迎されたようである。再びハイネマンによれば「有名な詩人、羨むべき神々の寵児が、彗星のごとく現われたのである。若き君主の大事な賓客には、男も女もこぞって敬意を表した。彼の美貌、彼の愛嬌、彼の機才が一つになって、実に魅惑的な印象を与えた」ということである。

ゲーテはワイマールの宮廷に出入りし、まず枢密評議官に任命された。やがてゲーテはワイマール公国の内閣の宰相になり、ワイマール公国の内治外交の中心人物として活躍した。その中の一つが、群小国家が分立していたドイツを統一するドイツ連邦運動であったという。この運動は実現しなかったが、ゲーテが大学で法律を学んだことが政治力を発揮できた原因であったのかもしれない。付言しておけば、当時の大学の専門学部は神学、法学、医学の三つだけで、文学や理学、工学、農学などの学部はなかった。

このようなゲーテが全ての官職を辞職していたイタリア旅行に出かけた理由については、いろいろなことが言われているようである。例えば恋愛問題から逃れるためであるとか、幼い頃からあこがれていた夢を実現するためであるとか、文学上の飛躍をめざすためであるといったものである。ここではそのどれであってもかまわない。

## 2. 出発からバドヴァまで

ゲーテの『イタリア紀行』は「1786年9月4日、レーゲンスブルグにて」という書き出しで始まる。ゲーテは「9月3日の朝3時にカールスバートを抜け出した。そうでもしなければ、とうてい旅にはでられそうにもなかったのだ。……私は旅套と穴熊の鞆とを用意しただけで、ただひとり郵便馬車に乗りこみ、美しい静かな霧の朝7時半にはツウォータについた」と述べている。(……は省略したことを示す。以下同じ)

レーゲンスブルグはワイマールの南南東約250キロメートルの地点であるので、この郵便馬車はかなりの速度で走ったことになる。ゲーテはさらに南下してミュンヘンからインスブルックを通り、9月8日には国境の町ブレンナー峠に到着している。現在はアルプスを越える国境の町であるが、当時ここは神聖ローマ帝国の領土であった。

『イタリア紀行』を読むとゲーテはもちろん詩人であるが、それ以上に気象学者であり地質学者であり、また植物学者、建築家、美術評論家であることを感じさせられる。

ブレンナー峠を越えてイタリアに入ったゲーテは、アルプスの南側の明るい気候に喜びを感じたようである。

「1786年9月11日朝、トレントにて」という項では、山を下りながら見た風景について「山麓の丘はぶどう畑になっている。長い低い造り棚の上に蔓を這わせてあって、あおいぶどうがいかにも綺麗に棚から垂れ下り、間近の地面の熱をうけて熟している。……日は暑く照りつけている。これで神を信ずる気持も取り戻せるというものだ」とゲーテは書いている。

やがてゲーテはガルダ湖という湖の側のトルボーレの町に着いた。彼はここの眺めがすっかり気にいったようで湖畔の宿に泊り、宿の主人が出してくれた鱒を食べたと友人に手紙を出している。

ガルダ湖の見物を終えたゲーテは、9月16日にヴェローナに着いている。ここには古代ローマの円形劇場が残っていて、彼は次のように書いている。

「円形劇場は、すなわち古代の重要な記念物のうち私の見る最初のものであり、し

かもそれは実によく保存されている。中にはいったとき、そしてまた上に昇って緑を歩きまわったときにはなおさらのことだが、私は何か雄大なものを見ているような、しかも実は何も見ていないような、一種異様な気持ちがした。……こういう作品を保存しておいてくれたのについては、ヴェロナ人は賞賛されなければならない」

ゲーテはまたこの町で多くの画を見ている。ゲーテは言う。「自分がこの不思議な旅をするのは、自分自身を欺くためではなく、種々の対象に触れて真の自己を悟り知らんがためである。であるから自分に画家の技巧とか手腕とかを理解する力が一こうにないことは、あからさまに自ら認めている」ゲーテはこのような思いで画を見ていたのである。ゲーテがここで見た画は、マリア昇天の図のような教会の祭壇を飾る画であった。

ゲーテは「偉大なもの、美しいものを欣然として心から崇敬することは、実に私の性分である」と語り、芸術にたいする彼の心情を披瀝している。

ゲーテは9月19日にヴェロナからヴィチェンツァに移動し、ここに26日まで滞在した。そしてここでは古い建築を鑑賞したようである。19日の日記を引用しよう。

「数時間まえに当地に到着し、もう町を一わたり駆け回って、パラディオ作のオリンピコ劇場や建物を見てきた。……こういう作の偉大な価値というものは、それを眼のあたりに見て初めて解るものである。けだしそれらは実にその現実的な大きさと具体性によって見る人の眼を充たすべきであり、抽象的な正面図においてのみならず、さらに遠近法上、近い部分と遠い部分が、常にその三次元の美しい調和を有することによって、人心を満足せしむべきものであるからだ。それゆえ私はパラディオを評して言う。彼は真に内面的に偉大にしてかつ内部から偉大性を発揮した人物であったと。……」

相良の註によると、オリンピコ劇場は古代の劇場の規範に従って設計されたもので、完成したのはパラディオの死後、1584年のことだそうである。ここではゲーテは詩人というよりも建築家、あるいは建築評論家の顔をのぞかせているようである。

9月26日ゲーテはセディオーラという一人乗りの馬車に乗ってバドヴァに着いた。この馬車の旅は快適だったようである。バドヴァには1222年創立の古い大学がある。この大学についてゲーテは次のように述べている。

「大学の建物は、見かけだけはいやに堂々としているが、いささか恐れ入った。自分はこんな所で勉強せずにすんで幸であった。ドイツの大学の学生でも、聴講席において少なからず不自由な目を見なければならぬが、しかしこんなに狭苦しい学校は想像がつかない。特に解剖学教室ときは、いかに学生を圧縮すべきかの典型のようなものである。……」

よほど教室や席が狭かったのであろう。しかし大学附属の植物園は気にいったようで、彼は次のように書いている。

「それだけに植物園の方はかえって一そう爽快で澆刺としている。多くの植物は石垣の傍なり、その付近なりに植えておけば冬でも地上に置きっぱなしにしても枯れない。全体は十月下旬になって囲いをつくられ、数か月だけそれを暖める。見知らぬ草木の間を逍遙することは愉快でもあり、有益でもある。……ここでこうした新しい多種多様な植物に接しているうちに、あらゆる植物の形態は、恐らく一つの形態から発達したものであるという例の考えが、次第に勢力を得てくる。恐らくこれによってのみ、真に種や属を決定することが可能になるのであろう。従来はこの決定がはなはだわがまま勝手に行われていたと思う。

この点で私は自分の植物哲学の虜となってしまっていて、未だに脱却の道を見出せそうな見込みが立たない。……」

ここでゲーテが述べている植物哲学とは一種の進化論的な考えで、植物学者として見てもすばらしいものである。何故なら、有名なダーウィンが進化論を説いた『種の起源』を発表したのは1859年のことであるので、ゲーテはダーウィンより73年も前に進化論的考えに到達していたと言ってよいであろう。そういう意味で彼の植物哲学という言葉は、非常に注目すべきものである。

なお付け加えておけば、ゲーテはこの旅行にリンネ（スウェーデンの植物学者、ウプサラ大学教授、植物命名法を確立した。1707～78）の本を持参していたという。

バドヴァの大学でゲーテが感銘を受けたものに、卒業生の塑像がある。引用しよう。

「膨大な楕円形の場所をかこんで、塑像が林立している。この地で教育を授けたり、または教育を受けたりしたことのある名士は、ひとり残らずここに飾られる。この土地の人たると否とを問わず何人にも、ある人物の功績とバドヴァ大学在籍とが証明されれば、・・・・一定の大きさの立像を建てるのが許されるのである。・・・・スウェーデン国王はグスタフ・アドルフがかってバドヴァで聴講したことがあるというので、その像が設置された。レオポルド大公はペトラルカ(1307～74)とガリレオ(1564～1642)とを新たに記念せられた」

ペトラルカはダンテなどと並び称されるイタリアの詩人であり、人文主義者である。ガリレオについては説明する必要はあるまい。このような習慣のある大学の話はあまり聞いたことがないが、感動的である。

### 3. ヴェネチアからナポリまで

1786年9月26日、ゲーテはバドヴァから乗合船に乗ってブレンタ河を下り、夕方にヴェネチアに到着した。この船旅はのんびりしたもので、ゲーテは次のように書いている。

「イタリア人たちと一緒に下った船の旅は、作法も乱れずに気持ちがよかった。両岸は農園や別荘で飾られており、小さな村が水際まで迫っているところがあるかと思うと、ところによっては人通りの多い国道が岸辺に沿って走っている。河を下るには水門によるので船はいくたびか停まる。その暇を利用して、われわれは陸に上がって見物もできれば豊富に提供される果物を味わうこともできる。・・・・」

羨ましいような船旅の様子が想像される。ゲーテはヴェネチアには特別な感情を持っていたように思われる。ヴェネチアに到着したときの様子を次のように述べている。

「私の乗っている船のところへ初めてゴンドラがやってきたとき、私は恐らく20年来思い出したことのない、あの昔の玩具を心に浮かべた。私の父はイタリアから携えてきた美しいゴンドラの模型を持っていた。父はそれをひどく珍重していたが、いつか私がそれを玩ぶことを許された時などは、非常に喜んだものだ。今、ぴかぴか光る鉄板の船首や、黒いゴンドラの船体や、すべてのものが昔馴染みのように私に挨拶をした。私は久方ぶりになつかしい少年時代の印象を味わうことができた」

ゲーテの父がイタリア旅行をしたのは1740年のことだったそうであるが、相良も『イタリア紀行』の解説で「ゲーテ個人のイタリアへの関心は、すでに少年のころ、故郷フランクフルトにおいて父の愛蔵していたゴンドラ船の模型によって萌していたものである……」と書いているように、ゲーテのヴェネチアにたいする思い入れはかなり深いものであったようである。ハイネマンの『ゲーテ伝』にも、父の持ち帰ったゴンドラの模型の話は出てくる。

ゲーテはヴェネチアで「イギリス女王」という旅館に宿泊したというが、この旅館は今でも「ホテル・ヴィクトリア」という名で営業しているそうである。彼はこの旅館にヴェネチアを去る10月14日まで滞在し、地図をたよりに歩き回ったりゴンドラに乗ったりしながら見物をしたようである。

ヴェネチアは現在、街全体が世界遺産に登録されているが、中世以来一度も君主を戴いたことがなく、独立した都市国家として市民の自治による政治を行い、地中海貿易の拠点として繁栄してきた。しかし15世紀のなかばにオスマントルコによってコンスタンチノーブルが陥落し、さらに新しくインド洋航路が発見されたりアメリカ大陸が発見されたりしたために、ゲーテの行った頃には世界貿易の中心ではなくなっていたのである。

9月29日の日記から引用してみよう。

「大運河とそれに懸かっているリアルトー大橋は容易にそれとわかった。この橋は、白い大理石でできている一個の弓形のものである。橋の上から眺めおろした光景はすばらしい。運河は、各種の必需品を大陸（筆者註：イタリア本土のこと）から運んできて、大抵はここに碇泊して積荷をおろしてしまう船舶で一杯である。そしてその間をゴンドラが蠢動している。……やがて疲れてきたので、私は狭い小路を捨てて、ゴンドラに乗った。こんどは今までとは反対に水上からの景色を眺めようと思って、大運河の北の部分を通りぬけ、聖クララ島をめぐる渦の中に船をのり入れ、ジュデッカの運河にはいりこんで、聖マルコの広場の方まで漕ぎまわした。……その際私



は、何よりも好んでこれらの風物を物語った父のことを懐かしく思い起こした。私もまた彼と同じようになるのではあるまいか。・・・」

ゲーテは少年の頃に父から聞かされたヴェネチアの話を思い出しながら、自分の観光を続けていたようである。

10月3日の日記より。「イル・レディントーレ寺院はパラディオの手になった美しく偉大な建築であり、その正面は聖ジョルジョより遥かに賞賛すべきものである。・・・  
・パラディオはまったく古代人の生活に心酔していたが、自己を没却せずして、他のものをできる限り自己の高遠な思想に従って改善しようとする偉大な人間の一人として、当代の卑小と偏狭とを感じていた。・・・」ゲーテのパラディオに対する心酔ぶりは相当なもので、彼はヴィチェンツァでパラディオのオリンピコ劇場を見物した時も、建築家としての一面をのぞかせながら感激したような文章を書いている。

10月9日にゲーテは干潟に出かけている。そこは海と干潟を仕切っているリドーと呼ばれている長い地峡で、満潮の時は海水に覆われてしまい干潮の時だけ姿を見せるという。そこでゲーテは海の生物を観察している。

「今日、私は海で海蝸牛（うみかたつむり）、陣笠貝、小蟹などの活動を眺め、心から楽しんだ。生物というものはなんと貴重な、すばらしいものであろう。なんとその状況によく適応し、なんと真実で、かつ現実的であるであらう。自然に関する僅かばかりの私の研究でも、どんなに私に役立ってくれることか。・・・」

ゲーテはこのように書いているが、ここにも彼の進化論的自然淘汰の考えが見える。

このようにヴェネチアを楽しんだゲーテは、10月14日に船でポー河をさかのぼり、フェ拉拉に向けて出発した。相良の註によると、フェ拉拉はこの頃、ローマ教皇領であった。ゲーテはここからチェントを経て10月18日には世界最古の大学街として知られるボローニャに着いている。ゲーテここでは馬車を借り切って見物したようで、「敏捷でよく勝手を知った馭者は、・・・早速あらゆる市街や、たくさんの宮殿や寺院を案内してくれた」と書いている。そしてラファエロのチェチリアという画につい

てながながと述べている。

「・・私はいまこの画について、これがただ彼の作であるということ以外には何も述べたくない。われわれに何の関係もない五人の聖者が相並んでいるが、その存在がいかに完全であるために、たといわれわれ自身は滅び去ってもいいから、この画のためには永遠の存続を願いたいくらいだ。・・・・」

ゲーテは10月19日に「私は見物、また見物、この日をでき得るかぎり利用したい」と書いているが、世界最古の大学については「この古い尊敬すべき学術都市」と述べているだけで何も言及していない。

ゲーテはアペニン山脈を越え、1786年10月29日にローマに到着している。11月1日付の友人に宛てた手紙には次のような文が見える。

「ようやく口を開いて、よろこんでわが友人諸君に御挨拶を送ることができる。・・・・・・チロールの峠は、いわば飛び越してきた。ヴェロナ、ヴィチエンツァ、バドヴァ、ヴェネチアはよく見たが、フェララ、チェント、ボローニャは駆け足で通りすぎ、フィレンツェはほとんど見物しなかった。つまりローマへ行こうという欲求が余りに強く足を留める気にならず、フィレンツェには僅か三時間いたばかりだ。・・・・私の記憶にのこる昔の銅板画 —— 私の父は控え室にローマの見取り図を掲げていた —— 今や私は本物として眺めている。・・・・」

ローマに着いて喜んでいるゲーテの姿が目に見えるようである。

ローマで彼はティッシュバインというドイツ人の画家と知りあいになり、彼の案内でローマを見物している。ティッシュバインは後に旅姿のゲーテの肖像を描き、この絵は岩波文庫『イタリア紀行』(上)の最初の扉のところに掲載されている。

ローマでは見物するものがたくさんあるが、ゲーテはただそれらを見て楽しむということを目的とはしていなかった。11月10日の日記には次のような記述がある。

「私はこの地で、久しく感じなかったほどの明朗さと落ち着きをもってその日を送っ

ている。ものごとをありのままに眺めかつ読みとろうとする私の修練、眼の光を曇らせまいとする私の誠実、あらゆる思い上がりをすっかり離脱しようとする気持、これらすべてがまた役立って私に人知れぬ幸福を感じさせている。・・・・四十歳にならぬうちに、偉大なものを研究し、習得して、自己を成熟させたいと思っているのだ」

私が最初にローマに行ったのは39歳の夏であった。その時は夫の留学していたスウェーデンのウプサラからたった一人で列車を乗り継ぎ、心細い気持で出かけたものである。当時は『イタリア紀行』を読んでおらず、彼のこの文章を読むたびに、これを読んだ後にローマに行けばもっとよくローマを理解出来ただろうと悔やまれる。

11月11日にゲーテはカラカラの競馬場、アッピア街道、水道橋の遺蹟を見物し「こんな大きな仕掛で国民の咽を潤おそうとする目的のなんと美しくも偉大なことか！」と感嘆の声を発している。この日の夕方には有名なコロッセオを見物した。西暦75年から80年にかけて建造された5万人収容出来る古代ローマの大円形劇場には私も圧倒されたが、ゲーテは次のように述べている。

「このように広大な劇場を眺めると、他のものはすべてちっぽけに見えてくる。その大きさときたら、その心像を心に保つことができないくらいだ」

11月22日、ゲーテはティッシュバインと一緒にバチカンを訪れ、シックストゥス礼拝堂でミケランジェロの「最後の審判」やその他の天井画を見て感嘆したという。彼は「私は眺め入ってはただ驚くのみであった。巨匠の内面的な確実さと男性的な力、偉大さはとうてい筆舌の尽くすところではない」と書いている。

私もバチカンには行ったがただ一人で案内人もなく、聖ピエトロ寺院の前の広場を歩きまわり、それからシックストゥス礼拝堂の天井画を見て、あまりにも素晴らしいのに驚いたことを思い出す。

この頃ローマは天気がよかったようで、ゲーテは12月2日に次のように記述している。

「十一月末のこうした美しく、暖かで、静かな天気は、私にはまったく新しい経験

である」

また12月13日の友人に宛てた手紙には「冬だというのに一こう冬らしくもなく、庭には常磐木が植わっており、太陽は明るく暖かに照っている。そして雪の見えるのは遠い北の山々だけである」と書いている。

私はヨーロッパの冬を経験したことはないが、人の話では緯度が高いので日が短くて天気が悪く、暗くて寒い日が続くという。ゲーテが明るくて暖かい南の国イタリアに憧れていた気持ちは日本人には理解できないかもしれないが、ヨーロッパの冬を経験したことのある人はよく理解出来ると言う。

1787年1月6日付の手紙にはクリスマスの様子が書かれている。引用してみよう。

「・・・私たちはクリスマスの夜そこらをうろつきまわり、儀式の行われている会堂を歴訪した。・・・オルガンと音楽は、牧者の笛、鳥の囀り、羊の鳴声など、いやりしくも田園楽として何一つ欠けるところのないような仕組みになっていた。・・・私は聖ピエトロ寺院で法王と全部の僧侶たちを見た。法王は半ば玉座の前で、半ば玉座の上から大法会を行った。それはまことに華麗にして荘厳な眺めであり、この種のものとしては実にたぐいのないものである」

バチカンのクリスマスを見ることが出来たとは羨ましい話であるが、ゲーテはさらに続けている。

「私の性情はすっかり新教徒的なものに慣れていて、こうした壮麗な儀式も私に何物かを与えるというよりはかえって奪うところが多かった」

いかにもプロテスタントのゲーテらしい言葉である。

寒いドイツから来たゲーテはよほどローマの天気が気にいったようである。2月17日には「天気は信じられないほど、また言葉にも言い表わし得ないほどに美しい。二月になってから四日の雨の日を除いていつも綺麗に澄み渡った大空が仰がれ、日中はほとんど暖かすぎるぐらいである。・・・」と書いている。

2月21日ローマ最後の夜である。ゲーテはヴェレトリを経て2月25日にナポリに到

着している。当時のナポリは、ナポリ王国としてフランス・ブルボン家が支配していた。ナポリは海に臨む風光明媚な地で、ゲーテは「ナポリの人たちは、自分たちのところは天国だと信じこみ、・・・」と書いている。2月27日に彼は「今日はもう夢中になって壮麗無比の名所見物にすごした。・・・この景観の美はすべてにたち越えている。海の渚と湾と入江、ヴェズヴィオ（活火山）、市街、洛外、城塞、遊樂場！・・・」と記しているが、さらに後にはナポリについて「私は今しばらくこの軽快にして陽気な人生の学校内にとどまって、もっと利益を得ようと思うのだが。・・・町の位置や温暖な気候は、いくら褒めても褒めきれない」と述べている。

3月19日にゲーテの今後の案内役として、ティッシュバインはクニープという画家を紹介してくれた。彼はローマに帰るというわけである。クニープはゲーテのために案内をしながらスケッチをしてくれるという。いわばカメラの代用品である。

3月20日にゲーテは活火山のヴェズヴィオスに登り、火山見物をしている。

「熔岩の噴出するのが見えてきた。・・・熔岩が・・・平坦な地面を流れ下る有様は実に見ものである。・・・太陽の光があまりにも明るいために、灼熱の流れも黒ずんでみえ、ただ烟が軽く清澄な空に立ち昇っていた。・・・私たちはもう二三十歩進んでいったが、地面はますます熱くなってきた。・・・」

地質学者としての面目躍如たるものがあるが、ずいぶん危険な場所まで行って噴火や熔岩流を観察したものである。現在ならば立ち入り禁止区域に入っていたことになる。

ゲーテはこのようにナポリを拠点として方々を観光している。3月23日にはサレルノを訪れ、ポローニャよりも早くに創立された大学に思いを馳せている。

「大学が盛名を馳せていたあの黄金時代に、誰かこの地に学ぶのを望まぬ者があったろうか」

サレルノの大学は特に医学で有名であったが、1817年に廃止された。ゲーテの行った頃は大学が傾きかけていたのであろうか。

1787年3月29日、ゲーテはクニープと一緒にナポリから船でシチリアへ出発する。4日間の船旅は船酔いで辛かったようである。伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』によれば、シチリアはもともとギリシアの植民地であったが後にローマ帝国に併合され、6世紀にはビザンティン帝国（東ローマ帝国）の領土となり、さらに9世紀の始めにはイスラムの勢力が侵入し、11世紀の半ばにはフランス王国のノルマンディーが入って来たために、ギリシア、アラビア、ラテンの三つの文化が共存する文明の十字路で、独特の文化を持っていたという。

しかしゲーテはこのようなことにはあまり触れていない。当時のシチリアはフランス王国の領土であった。1787年であるからフランス革命の2年前であるが、ゲーテの記述のどこにも革命の予徴はない。ただ「イタリア人はフランスを憎んでいる」という記述が見えるだけである。

5月16日にゲーテは再びナポリに帰っている。そして6月6日、再度ローマに入った。ここではまたティッシュバインが何くれとなくゲーテの面倒をみてくれたようである。

6月末ゲーテは次のような手紙を友人に送っている。

「私はあまりに大きな学校に入学してしまったために、なかなか急に卒業が許されないといった観がある。私の芸術上の知識やわずかばかりの才能はこの地で徹底的に完成され全く円熟させられなければならない。さもないと私はまた中途半端なまま諸君のもとに戻ることになるだろう。・・・」

ゲーテの努力、向上心がよく伺える言葉である。

日付のあるゲーテの文は1788年4月14日のものが最後である。彼はこの旅行記の最後に次のような詩を書いている。

ローマを去りなんとする最後の夜の  
悲しき街の姿を心に辿り、  
懐かしきものの数多を捨てさりしかの夜を思えば、  
はふり落ちる涙の珠。

かの夜、人声も犬の遠吠もしずまりて、  
月姫のみ、空たかく夜の車を駈しいたりき。

## おわりに

イタリアはゲーテにとって少年時代からの憧れの地であり、イタリア旅行は父の願いでもあった。彼はこの『イタリア旅行』の副題を「Auch ich in Arkadien!」(われもまたアルカディアに！) とつけた。相良によるとこれはラテン語の「Et in Arcadia ego」からきているという。この言葉は、ルーヴル博物館にあるプサンの絵で、三人の牧童と一人の少女がこのラテン語の銘文の書かれた墓碑を見つめていることで有名になったということである。ちなみにアルカディアとはギリシア南部の地名で、ここは古代からギリシア人の理想郷であり、物語などの舞台に用いられるようになった。ゲーテにとってイタリアは憧れの地であると同時に、理想郷でもあったのである。

最後に『ゲーテ伝』の著者ハイネマンがゲーテのイタリア旅行にたいしてどのように書いているかを紹介して、この文を終えたいと思う。

「ゲーテの芸術的形成および観照に対するイタリア旅行の意義は、往々にして過大評価されてきた。彼がしばしば口にしている更生というものも、彼が今までの観点とまったく絶縁したというふうに解すべきではない。彼はイタリア以前すでに古代の熱心な信奉者であった。更生とか新生とかいうのがなにを意味するかは、イタリアへ出発するまでと、それからイタリア旅行中との、ゲーテの芸術的形成および観照の上に及ぼした諸影響を、彼此の関連において考えて見る場合に、はじめて理解できることである」

## 参考文献

1. ゲーテ『イタリア紀行』相良守峯訳、岩波文庫、2004年。
2. ハイネマン『ゲーテ伝』大野俊一訳、岩波文庫、1983年。
3. 伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』講談社学術文庫、2006年。